昭和46年10月31日発行通巻34号（毎日曜日発行） 昭和46年２月５日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日＝ラルース

10/31
220円
34

週刊 世界動物百科



いまなお山野を放浪し続けるイヌのなかまたち

イヌ・シリーズ

5. 野生犬

ディンゴ，パリア犬，オトキオン，リカオン，タテガミオオカミ，ドール，カニクイイヌなど

朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第34号

カラーページ

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

10月27日発売



世界動物百科
35号　11／7

カラーページ

雪の降る夜，いろりばたでおじいさんが話してくれた昔話。そのなかに，よくキツネが登場しました。人を化かす悪知恵のある動物として。それは，人間とキツネが平和的に共存していたよき時代のこと。キツネも昔話もまた「滅びゆくもの」なのでしょうか。

私たちの仲間

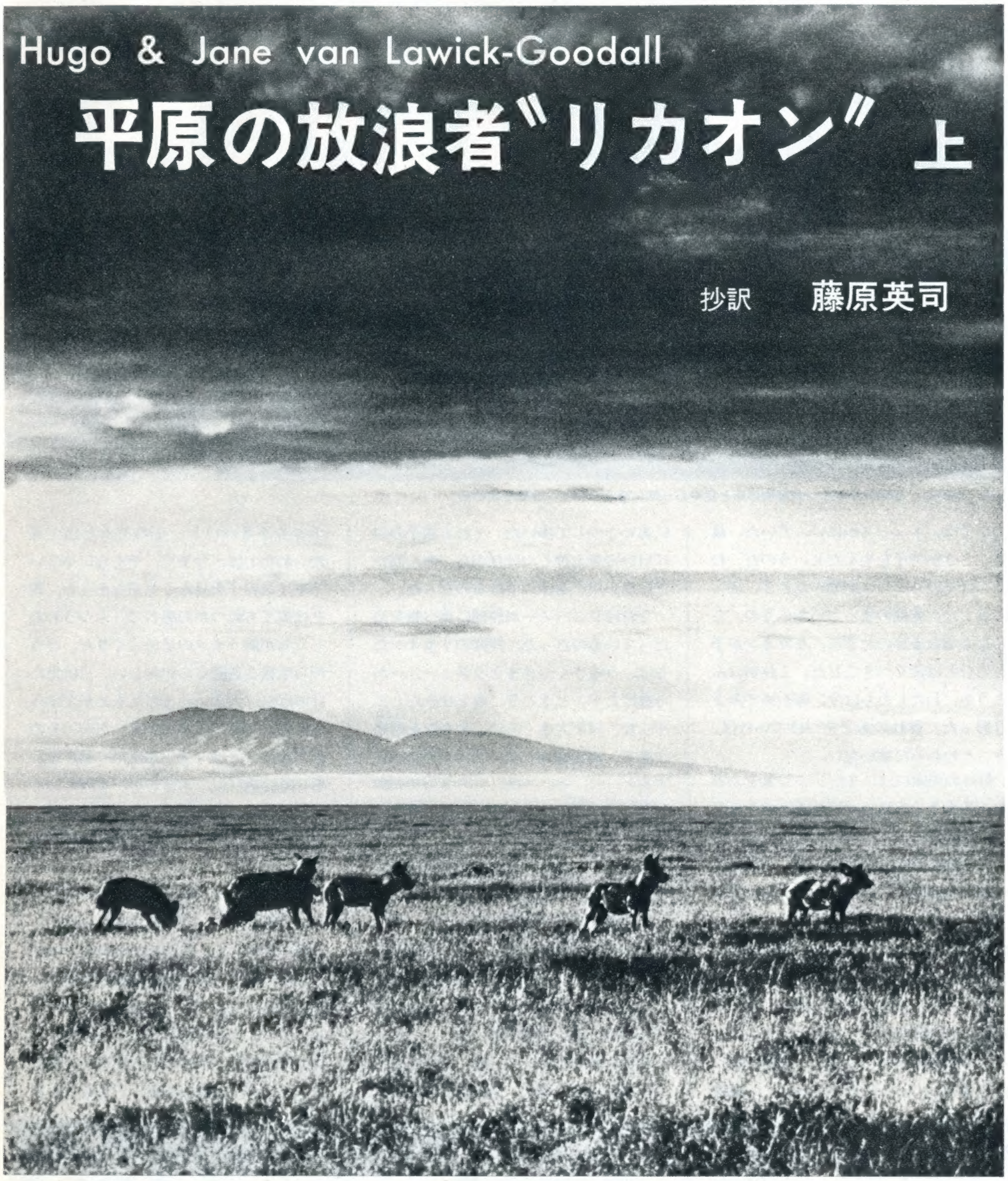
私たちの仲間

34号…10月31日

Hugo & Jane van Lawick-Goodall

平原の放浪者〝リカオン〟上

抄訳　藤原英司



ゆうげの狩りのあと，セレンゲッチー草原（東アフリカ）をいくリカオンの群れ　彼らは，夕暮れや月夜の晩，早朝などに狩りを行ない，昼間は子どもたちの傍で休んでいる

原著者紹介

H・グドール（H. Goodall）は写真家で，動物行動学研究者ジェーン・グドールの夫君。ジェーンは1960年代の半ばに，野生チンパンジーの研究者として，彗星（すいせい）のごとく世界の学界に登場した。彼女を育てたのは人類学者リーキー博士で，ジェーンは博士の秘書として，東アフリカにおける古代人骨の発掘に参加した。その後，博士のすすめで，単身，野生チンパンジーの観察に従事し，幾多の生態学的新発見を行なった。のちに同博士のとりなしで，現地に派遣された写真家と結婚した。結婚後，2人は育児のつごうで，一時ハイエナ類の観察に転向。ここに紹介するのはそのときの夫婦の共著 Innocent Killers（1970年）のなかの1編である。この本には従来謎（なぞ）に包まれていたリカオンとハイエナ，キンイロジャッカルの生態が活写されている。生態上の新発見も多く，それが迫真的な写真とともに記録され，世界の学界からその功績を高く評価されている。（藤原）

東アフリカのゴロンゴロ野獣保護区から北西にしばらく進んだところに，ラガジャ湖がある。その湖から8キロほどのところを，今，11頭のリカオンの群れが，1列になって，とことこ駆けていた。

群れを率いて先頭を走るリーダーは，わたしたちがジェンギズと名づけている年とった雄だった。

あたりには，短い草がはえた平原がひろがっていた。しかし今は8月で，乾期の中ごろにあたり，乾燥した荒地のようにみえる。ガゼル（小型のカモシカ類）の小さな群れがいたが，それも今は数がずっと減っていた。

やがて，ジェンギズが，ごくわずかではあるが，突然進路を変えた。かなたにトムソンガゼルの雄が1頭，立っているのが見えてきた。リカオンの群れは，今，そのガゼルのほうへ，ゆっくりと進み始めた。

ガゼルはリカオンの群れが進んでくるのを見つめていた。そして相手が200メートルぐらいまで近づいたとき，急に走りだした。しかしまるで足が突っぱったような，妙な跳躍のしかたである。

それをみると，今までゆっくり進んでいたリカオンの群れは，いっせいに全速力の追跡に移った。一方，ガゼルは妙な跳躍をやめ，これも全速力で，流れるように平原を疾走しはじめた。

リカオンの群れは，1列になったまま，全員がスピードをあげた。そして，すぐに群れのなかの2頭が，他の仲間をぐんぐん追い抜きはじめた。スイフトとバスカビルだ。2頭とも若い雄で，足が速い。2頭はみるみるリーダーのジェンギズに追いつくと，そのままリーダーを追い越して，獲物に追いすがっていった。2頭はますますスピードをあげ，獲物との距離は少しずつ縮まりだした。

他のリカオンたちは，1列のまま追跡を続けていく。わたしたちは，そのあとを車で追った。1キロ半ほど進んだころ，先頭の2頭が，ついにガゼルに追いついた。

スイフトとバスカビルは，獲物に追いつくと，そのまま左右に分かれて，ガゼルの両側へ出た。ガゼルはあわててスイフトを避けようとするように，反対側へよけた。ところがそこにはバスカビルがきていた。

バスカビルは，たちまち相手の首にとびついた。両方とも猛スピードで走っていたため，衝突の衝撃は大きかった。バスカビルはガゼルの首に嚙（か）みついたまま空中へはねあがり，もんどりうって転倒した。しかし獲物の首にしっかり嚙みついて放さなかったので，ガゼルはバスカビルの上にのしかかるような格好でひっくりかえった。

もうもうたる砂煙があがり，一瞬，わたしたちは視界をさえぎられた。だが，次の瞬間，スイフトが同じように，ガゼルの首に嚙みついている姿が見えた。そして，のたうちまわるガゼルと，食いついて離れない2頭が巻きあげる砂煙のなかへ，他の9頭のリカオンが，続々と突入していった。



時速50〜55キロの速度で　ふつう4〜5キロ獲物を追跡する　やがて，先頭のリカオンが獲物のあと足やしっぽに嚙みついて，攻撃を始める

9頭のリカオンは，すぐ獲物を嚙み裂いて食べだした。するとスイフトとバスカビルも獲物の首を放して，いっしょに食べ始めた。

こうして，ガゼルは引き倒されてから30秒以内に絶命し，リカオンたちの饗宴が始まった。

そして15分もたつと，現場には骨が2，3本ぐらい残るだけになり，リカオンの群れは，再び元きたほうへ，小走りにもどりだした。

出迎える子持ちのリカオン

わたしは，このリカオンの群れをよく知っていた。2年半ほど前にはじめてこの群れに出会って以来，このあたりを通るたびに何回も見ていた。群れのメンバーに1頭ずつ名まえをつけて，生態を観察してきたが，今，群れのほかの1頭が見当たらなかった。それはジューノーという雌だった。だが，このジューノーについては，ニュースがはいっていた。最近，どこかで子を生んだというのだ。わたしはそのニュースを聞いたとき，びっくりした。乾期のまっさいちゅうの，こんな不利な条件のときに，リカオンが子を生むとは驚くべきことだ。これがほんとうか，わたしたちは今，確かめてみよう思った。群れのあとをつけていけば，きっとわかるに違いない。

群れの先頭には，またジェンギズが立ち，リカオンたちは一定の速度で，とことこと進んでいく。かれらは同じペースで，平原を6キロほど進んだ。すると，かれらの前方に，別のリカオンが，急に1頭姿を現わした。それはまるで，ふいに地面からわいてでたように現われた。ジューノーだ。

ジューノーは尾を振りながら，狩りから帰った仲間のほうへ駆けだしてきた。そして仲間のそばへくると，仲間のあいだを気違いのように走りまわって，順番にあいさつして歩いた。それも相手の口に自分の鼻を押しつけながら，かん高いきいきい声をあげつづけるのだった。

これはジューノーが仲間に食べ物をねだっているのだった。仲間のリカオンたちは，うるさくつきまとうジューノーから逃げたが，ときどき，肉を吐きだしてやった。口を大きくあけ，からだを痙攣させて，肉を地面に吐きだすのである。すると，ジューノーは，たちまちその肉を平らげ，すぐにまた食べ物をねだりだした。

ジューノーはそうやって何回か食物をもらったあと，地面に口をあけている大きな穴のところへ出かけていった。そして穴の中をのぞきながら，やさしい声で鼻を鳴らした。それから穴にもぐりだし，だんだんからだが中へはいって，ついに尾の先だけが外に残った。

そのうちにジューノーは，あともどりして穴から出てきた。同時に穴からは，子どもが8匹ほど，ぞろぞろと出てきた。わたしは，今まで，そんなに小さいリカオンの子を見たことがなかった。親とは似ても似つかぬ感じで，ふつうわたしたちが飼うイヌの子そっくりだ。どうやら生後3週間ぐらいらしい。足は先だけがばかに大きく，まだ足もとが定まらなくて，ぐらぐらしていた。だが，その年ごろにしては，ずいぶん早く動きまわる。耳は親に似て大きいが，まだしわくちゃだった。顔は黒くてしわだらけで，子どもというより，年寄りの顔みたいだった。

子どもたちは穴から出てきても，おっぱいを飲んだり，自分たちで遊んだりする暇はなかった。おとなたちがすぐに寄ってたかって，子どもたちをころがしだしたからである。おとなのリカオンたちは，よたよた歩きまわる子どものあとをついてまわり，子どものお腹の下へ鼻先を入れてぐいと持ちあげ，子どもたちを





リカオンの子どもたちは成長するにつれ，巣穴を出て地上で遊びまわる

子どもを運ぶときは，2頭が協同して子どもの背中をくわえながら運ぶこともある

その場へころがした。それから四つ足をあげてひっくりかえった子どものお腹をぺろぺろとなめるのだった。

子どもはしばらくお腹をなめられていたが，やがてもがいて起きあがり，再びよたよた歩きだす。おとなたちは，どうかすると1匹の子に4頭もたかって，たがいに相手を押しのけあいながら，子どもをなめまわした。

むこうのほうで子どもの股に，後ろから鼻を突っこんでいるのは，ハバックという雌である。ハバックが子どもの尻を押しあげたので，その子は前足だけでよちよち進んだあと，ついにごろんとひっくりかえった。

このリカオンの群れには，ほかにブラック・エンゼルとロータスという雌がいた。ブラック・エンゼルは尾が半分しかないが，たいへんな子ども好きで，今も，次々と子どもをからかっていた。



子どもたちの勢ぞろい　リカオン一族は子だくさんである

やがてハバックが，子どもを1匹くわえあげ，穴のほうへ運びだした。そろそろ穴へ入れようと考えたらしい。だが，子どものくわえ方は変わっていた。背中をくわえて運んでいくのだ。すると，ブラック・エンゼルが手伝いにとんできた。そして同じ子どもの首をくわえ，2頭でいっしょに1匹の子を穴へ運んでいった。

苦労の多い母親の授乳

リカオンの母親たちがお産をするのは，平原が緑一色になり，動物の移動が盛んになる時期である。その時期には食糧が豊富になり，雄たちは毎日2回，早朝と夕方，そろって狩りに出る。そして，ほとんど毎回，狩りに成功する。

1腹の子の数は16匹にも達する。飼育下では，19匹の子が生まれた記録がある。だが，そのうちの3匹は死産だった。野生のリカオンの場合も，おそらく2，3匹は死産があるのではないかと思う。

ところで，リカオンの母親の乳首は，ふつう12から14個しかない。だから16匹生まれた場合，全部が一度に乳を飲むことはできない。しかし，子どもたちが乳ぶさの奪いあいをするところは見なかった。必ず，あぶれた子が2，3匹，そばで自分の番がくるのを，おとなしく待っていた。先に飲みだした子は，満腹すると乳ぶさを離してわきへ寄る。するとそのあとに，待っていた子がしゃぶりついた。だが，あとから吸いついた子は，どうもじゅうぶん飲めないことが多いようだった。それはおのおのの乳ぶさがミルクを出す能力に，限界があるからだろう。1回に乳ぶさを吸わせる時間は，平均2分半から3分だった。

リカオンの母親は，ふつう立ったままで，子どもに乳を飲ませる。そのため，子どもたちは，まっすぐ立ちあがって乳ぶさに吸いつく。そして，小さな前足で乳ぶさをこねまわすこともあるが，ときにはからだのバランスを保つため，両方の前足でほかの頭や背中に，つかまっていることもあった。



母親は子どもに肉を吐きもどし，食べやすくして口移しに与える

母親は，乳を飲ませるのをやめようと思うと，いきなりわきへとびのく。すると，あとには子どもたちが上を向いたまま，2列になってとり残される。おたがいにつかまっているから，ひっくりかえらず，なかには口をとがらせたまま，まだ乳を吸うように口を動かしているものもある。しかし，のびあがって乳ぶさだけにしゃぶりついていた子は，突然，つかまっていた乳ぶさが消え，バランスを失ってひっくりかえる。

リカオンの母親が子を育てるうえでの問題といえば，ふつうは，子どもの数が多いことから起こる問題が，ほとんどである。だがジューノーの場合には，ちょっと変わった問題が起こった。

まず最初のやっかいごとは，自分より優位にたつ雌ハバックに，授乳をじゃまされることだった。ハバックはジューノーのそばへ出かけていき，ジューノーを，その子のそばから追いはらった。

やがて，子どもたちが大きくなり，穴の中が狭くなると，ジューノーは外で乳をふくませるようになった。すると今度は，また別の災難がふりかかってきた。ブラック・エンゼルとロータスが2頭でそばへやってきて，子どもたちといっしょに，ジューノーの乳ぶさにとりついて，おっぱいを飲み始めたのである。最初は，子どもたちがしゃぶり終わった乳ぶさをなめているだけだった。ところが，たちまちほかの子と同じように，乳ぶさを吸い始めるようになった。これは，ひょっとすると，乾期のため，水分が不足していたからかもしれない。なにしろいちばん近い水飲場までは，16キロもあったからである。

子どもたちの〝しっぽ遊び〟

巣穴はリカオンの子どもたちにとって，すべての危険から身を守ってくれる安全な場所だった。たとえば，鳥が低く飛んでくるとか，ハイエナやジャッカルの姿が見えると，子どもたちは，いち早く巣穴の中へとびこんで難を避けた。

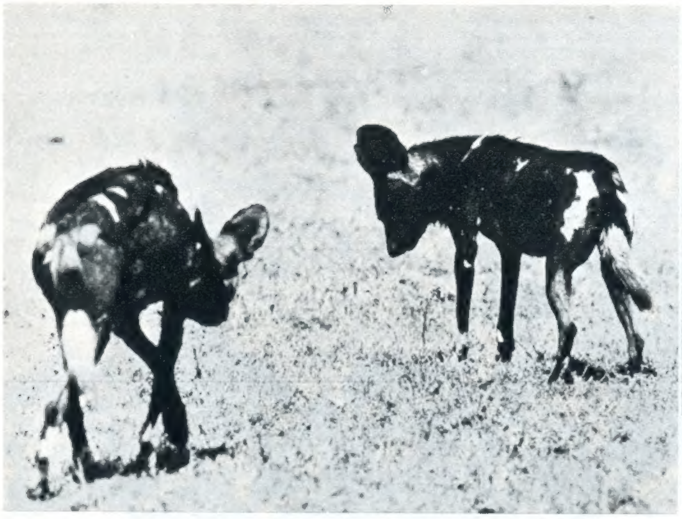
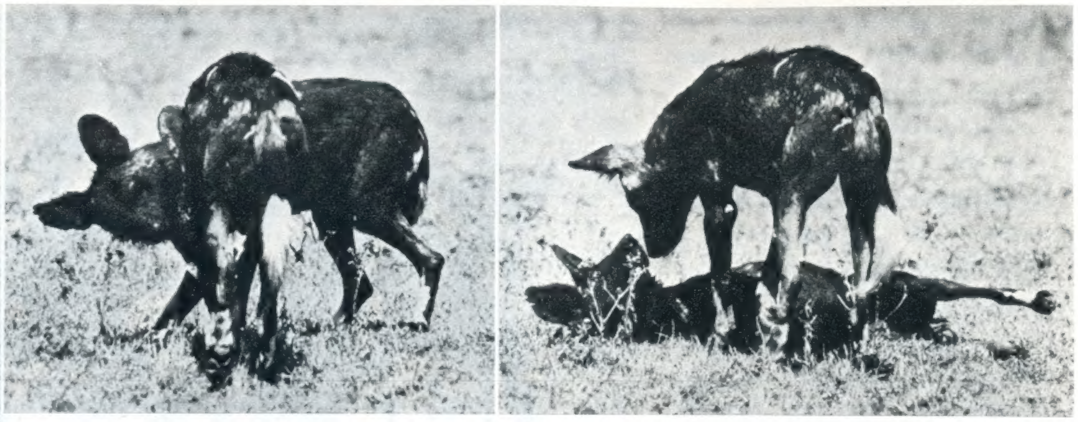
だが，子どもたちと巣穴について，今でも忘れられないことは，ある朝，かれらが朝日を見て，びっくりしたようなようすを見せたことだった。

その日，わたしはちょうど夜明け前に，巣穴のそばへ着いた。折りから日がのぼるところで，まもなく赤黒い感じの太陽が，地平線の上に姿を現わした。そのときリカオンの子4匹は，穴の外側の入り口のところに寝そべっていたが，みんな，いっせいに赤い太陽をじっと見つめ，耳を立てた。ところが次の瞬間，4匹は大あわてで巣穴にころげこんだ。

しかし2，3秒もすると，小さな4つの頭が，そっと穴のふちからのぞいた。いずれも額にしわをたくさん寄せ，いかにも不思議でたまらないという顔をしている。みんな頭を出して外を見たが，すぐにまた，ぱっと穴に引っこんだ。

そして，またすぐに，そろそろと頭をあげてきた。まず大きな耳がのぞき，やがて，小じわの寄った額が出てきた。そして目が草の上に出ると，みんなさしのぼる太陽のほうをじっと見つめた。それは実におもしろい光景だったが，はたして子どもたちが，ほんとうに太陽を見つめて，そのようなことをしたのかどうかは，はっきりしない。ひょっとすると，わたしには見えないものが，なにか見えていたのかもしれない。

リカオンの子がよくやる遊びは，しっぽの引っぱりあいだった。ジューノーの子どもたちは，おたがいにしっぽや耳を

雌の順位関係　ハバックがロータスへ近づいていく（左）
ロータスは，服従の姿勢として首すじを差しだす（中）
ハバックが鼻づらをロータスの首へ突きつけると，ロータスは横になって完全な降伏の姿勢を示す（右）

くわえて引っぱりあったが，それも実に乱暴にやった。

しっぽの引きあいは，子どもどうしだけの遊びではなかった。子どもたちは，近くに寝そべっているおとなのしっぽもねらった。あるとき，デーモンという子が，背後からジューノーに忍び寄ったことがあった。その進み方は，おとなのリカオンが獲物に忍び寄るときのやり方と，まったく同じだった。

やがてデーモンは，母親のしっぽにとびついた。すると，母親は口をあけて子どもをおどし，子どもはとびのいた。ところが，子どものほうでは，それであきらめようとはしなかった。すぐにまた，しっぽにとびかかり，唸りながら，しっぽを引っぱりだした。

ジューノーは子どもをおどして追いはらったが，子どもは何回でも，しっぽをねらってとびかかった。5回めに，母親はとうとう息子の鼻づらを噛んだ。子どもはとびのき，母親は前足の上に頭をのせて，再び寝そべった。デーモンは少し離れたところに腰をおろし，母親のしっぽをじっと見つめた。そのうちにデーモンは，母親の顔をちらっと見て，またしっぽを見つめた。だが，最後に母親の顔を見つめると，あきらめたように立ちあがり，その場から離れていった。

ある日，ブラック・エンゼルが居眠りをしていると，スプライトという子が，後ろからこっそり忍び寄って，しっぽにとびついた。ブラック・エンゼルは，びくっとしたように頭を起こした。だが，とびついてきたのが子どもだとわかると，片方のあと足で，えいと蹴とばした。とたんにスプライトは，毛糸の玉のように，ころころところげていった。

そのとき，そこへデーモンがやってきて，同じようにブラック・エンゼルのしっぽにとびついた。ところがブラック・エンゼルは，もう顔をあげようともしなかった。ただ黙って，ぱっと蹴とばした。するとデーモンは，しゃがんだままの姿勢ではねとばされ，やがてもうもうたる砂煙をあげて墜落した。

デーモンは落ちたところで，しばらくじっとしていた。ブラック・エンゼルは，身動きもせずに寝そべっている。やがてデーモンは起きあがり，またしっぽに忍び寄りだした。すると，スプライトも仲間に加わった。そして，2匹がじりじりと詰め寄っていった。しかしあとちょっとというところで，ブラック・エンゼルは頭をあげて，子どもたちを見た。2匹の子はあわてて，その場に凍りついた。だが，次の瞬間，ブラック・エンゼルははねあがり，2匹の子にとびかかった。しかし，彼女はすぐに，ちぢこまった子どもたちを，すごい勢いでなめまわしだしたのだった。

雌のあいだの社交ルール

リカオンの群れには，オオカミと同じように，2つの異なった階級がある。つまり雄どうしのあいだと，雌どうしのあいだの階級である。わたしが観察したリカオンの群れでは，雄どうしのあいだの階級は，完全に解きあかすことができなかった。ただ，年とった群れのリーダーのジェンギズがいちばん上で，次がスイフトだということはわかった。その下に，バスカビル，ハディス，ラスプーチン，リパー，リノゴー，イェロー・ペリルという雄たちが従っていた。

雌はハバック，ブラック・エンゼル，ロータス，ジューノーの4頭だったが，この4頭の関係は，比較的見定めやすかった。4頭のうちで，いちばん低い位置にいたのは，ジューノーである。ハバックやブラック・エンゼルが近づいていくと，ジューノーはきまって，相手のごきげんをとるようなしぐさをした。脣のすみをもちあげて，笑いかけるような顔つきをするのだ。それから頭を下げて地面にうずくまり，尾を激しく振り動かす。そのほか，よく見られたしぐさは，相手のほうへ首すじをさらして，服従を示すことだった。ジューノーはいつもそうやって，従順さを示したが，それでもハバックとブラック・エンゼルは，いつもジューノーをいじめる口実を見つけた。そして，さも罰を与えるのだというように，差しだされたジューノーの首を，軽く噛んだ。ジューノーは，ロータスのことをあまりこわがっていなかった。しかし，順位は明らかにジューノーのほうが下だった。

また，ブラック・エンゼルとハバックのあいだは，ハバックのほうが上だった。ある日，この2頭のあいだで，おもしろい光景が見られた。ちょうどジューノーが，自分の子をなめていたときだ。そこへブラック・エンゼルがやってきた。ブラック・エンゼルはジューノーのそばへいこうと，2，3歩踏みだした。しかしすぐに思いとどまると，少し離れたところに立っていたハバックのところへ出かけていった。そして，自分より優位なハバックの頭に，軽くあごをすりつけてから，ジューノーのところへ駆けだしていき，相手の首を噛んだ。すると，すぐにハバックがあとを追いかけていった。そしてブラック・エンゼルに軽く噛みついた。

最初，わたしは，それがなんのことなのかわからなかった。しかし，その後，何度も同じことが繰り返されるのを見ているうちに，やっとその意味がわかってきた。つまり，ブラック・エンゼルは，自分より弱いものを噛みにいく前に，自分より強いハバックに了解を求めるのである。そしてそのあとで，弱いジューノーやロータスを噛みにいく。ところがハバックは，ブラック・エンゼルにボスのまねをさせたままにはしておかない。必ずあとをついていき，ブラック・エンゼルを噛んで，強さの順序に示しをつけるというわけである。わたしにはどうも，そういう意味のように思われた。そしてハバックは，ブラック・エンゼルを噛むとき，決してきつく噛まなかった。それどころか，ときには噛んだあとで，すぐやさしく愛撫するようなしぐさをして慰めた。これは，自分のほうが上だということがわかってくれれば，敵意はないのだということを示すためのようだ。■

Innocent Killers
by H. & J. van Lawick-Goodall.

漢字のふるさと　26

藤堂明保



狆（ちん）　中国原産の愛玩用の小イヌで，チョンという発音がなまって，日本ではチンというようになった。チンは新羅をへて日本に伝わった。今の北京語では，「獅子狗儿」(shizigour)，「哈巴狗儿」(habagour) などと呼んでいる。

毛が深くて，白黒のまだらのものが多い。「獅子狗儿」という名が示すように，小さなコマイヌに似ており，目がまんまるでかわいらしいイヌである。

「狆」という字は，「犬」＋「中」であって，屋外ではなく家の中で飼うイヌ，という意味を含めたものである。

もっとも，中国の西南地方の貴州（コイチョウ）省には，仲家（チョンチャ）と呼ばれる苗族の一派が住んでおり，それを「狆」という字で書き表わした書物もあるが，それはまったく別の用法である。

日本では，徳川綱吉がぜいたくをきわめて，イヌをだいじにしすぎたあげく，「犬公方」というあだ名をつけられたというが，それに匹敵する中国の例がある。いま『隋書』を見ると，「南朝の斉のすえ（6世紀）に，宮中では愛犬に開府儀同という官名を与え，その雌を夫人・郡君などと呼ばせていた。が，まもなく国が滅ぼされた」と述べている。その愛犬とは，たぶんこのチンであろう。

なお，外来犬のうちブルドッグは「牛狗」(niugou)，シェパードは「狼狗」(langgou) と呼ばれている。■



野生犬

野生犬（wild dogsあるいはnature dogs）ということばには，2つの意味がある。1つは，家犬〔野生であるディンゴ，パリア犬をふくむ〕をのぞいたすべてのイヌ科の動物をさす場合であり，もう1つの意味は，家畜になっているイヌ〔ディンゴ，パリア犬をのぞいた家犬〕以外をいう場合である。ここでは野生犬を後者の意味に使おう。〔注1〕

かつて，野生犬とは，人間が放し飼いの状態にしたものが，逃げたり，飼い主に捨てられたりして，野生にもどったものだと思われていた。ディンゴとパリア犬に限っていえば，前者は飼いイヌから野生化した可能性があり，後者は野生から飼いイヌに近づいたといえよう。

ディンゴ

Canis familiaris putiatini

オーストラリアだけにいる野生犬で，家犬と同じ仲間だが，原始的な姿をした別の亜種になっている。ディンゴを家犬とは別種とする見解もあり，その場合の学名は*C. dingo*となる。オーストラリアには，何種類かのコウモリや齧歯（げっし）類がいるが，それをのぞくと，ディンゴ（Dingo）は野生している唯一の真獣類〔単孔目，有袋目をのぞいた哺乳（ほにゅう）類〕である。また，この大陸にもとからいる哺乳類の大部分は有袋（ゆうたい）類であることから，ディンゴは人によって持ちこまれ，その後，野生にもどったのだとふつういわれている。

しかし，このイヌの骨が，第三紀層時代〔100万年以上のむかし〕といわれるところから，大型有袋類の骨の化石に混じって出てきたということがあるが，第三紀層時代に人類がいたかどうかは論議のあるところである。どちらにしても，はっきりした結論はついていない。



ディンゴ。イヌ科イヌ属。
オーストラリアにしかいない犬種であり
動物学者によっては，人間が
ここに持ちこんだものだといっている。（上）
PH. G. DELISLE - AARONS

各地固有の野生犬の分布図。
パリア犬については，分布線が明確でないので
地図には記入していない。
しかし実際には，北アフリカの一部と
アジアには，かなり広く分布している。
作図　日本工房

ディンゴは，ほぼ中型の牧羊犬と同じくらいの大きさで，シェパードの雑種のようにもみえる。体高60センチほどである。からだはがんじょうで，頭部は大きく，どっしりとしていて，吻（ふん）は短い。耳は立っており，そのつけ根は太く，先は丸くなっている。尾は飛節（ひせつ）までの長さがあり，毛が密である。四肢（しし）は，長いというほどではないが，そのぶんだけがっしりしている。

からだの毛は短く，色は赤褐色，黄褐色，黄土色などで，背面よりも腹のほうにいくにしたがって淡くなっている。このような色ではないディンゴもいるが，それはのらイヌとの交雑の結果で，純粋なディンゴではなくなってしまったものだろうと考えられる。尾の先，鼻先，肢（あし）の先の白いものもいる。

ディンゴの生活はオオカミなどと似ており，夕方もおそくなってからでないと，隠れ家から出ないし，また，地上のあらゆる動物を敵として襲いかかっていく。1匹でいる場合もあれば，母と子からなる5，6匹の群れのときもある。

ディンゴは，ヒツジや子ウシなども容赦なく襲うし，カンガルーにとっても人間以外の最大の敵である。もちろん齧歯（げっし）類も安全ではない。

ディンゴは岩穴，木の穴，地面の穴などのすみかで，1回に4～8匹の子を生む。もし，そこが危険になれば，母親は，安全なところへ，急いで子を導いていく。

不死身の狩人

ディンゴがもっとも恐れる相手は，人間である。人間に取り囲まれ，逃げられないとみるや，猛然と襲いかかってくる。そのバイタリティーは驚くべきもので，丸太でなぐられ，からだじゅうの骨がくだけたかと思われるディンゴが，人間がいってしまうと，なにごともなかったかのように立ちあがり，森のなかに帰っていった，という例があるほどである。

ディンゴは，長いこと飼えないものと思われていたが，オーストラリアの原住民は，子を拾ってきては，狩りに使うように育てていた。利口な動物で，子のときに捕えると，完全に飼いならせるという。そして，人間との信頼関係も結べるようになるという。しかし，発情期ともなると，森へ逃げだして二度ともどってこないのも多いといわれる。イヌといっしょに飼わないかぎり，野生のままではワンワンと飼いイヌのように鳴くことはない。

もっと魅力的な姿をしていたなら，人間も真剣に飼いならしたろうから，すばらしい狩猟犬となって野山を走っていたことだろう。



ディンゴ。イヌ科イヌ属。
体高50～60センチ，体重25～27キロと
オオカミよりやや小型だが，跳躍力があり
ヒツジを守っている柵などは軽くとびこえる。
ふつう，ウサギやカンガルーなどを食べている。
PH. P. PFEFFER



パリア犬

Canis familiaris putiatini

パリア犬（Pariah dog）もディンゴと同じ家犬の仲間で，ディンゴと同じ亜種にはいり，これ以降に述べる野生犬とは違う種類である。

パリア犬は，19世紀には，バルカン半島から北アフリカ，インド，日本，ボルネオを通ってオセアニアにいたる東洋の街をさまよい歩いていたという。当時の東洋の街は衛生状態もよくなく，夜ごと残飯をあさりながら騒騒しく渡り歩くイヌの群れが，街の清掃人の役目を果たしていた。たとえばイスタンブールでは，1900年以前にはパリア犬がたくさんいたが，1900年に，海に追いおとして撲滅させた。

からだつきや大きさは，地方によって異なっているが，それらを別の種ときめつけることはできない〔注２〕。パリア犬の歴史は，数千年のむかしにさかのぼるが，食物を求めて人間のまわりで野生生活をしていたもののあるものが，街犬となった公算が大きい。

パリア犬は一般に人間になれにくい。しかし，なかには人間になれる個体もあるが，概して野性が強いので，成犬になると野生生活にもどろうとする傾向がある。飼いイヌの一部には，パリア犬が数十代も人間に飼われ，飼いイヌになったと思われるのもある。〔注３〕

現在のパリア犬の動向はあまり研究されていないが，ジャワ，スマトラ，インド，タイなどの街犬にはパリア犬の色彩を帯びたものがいる。北アフリカの岩山には，ウマの屍体などをハゲワシと争うほどの群れがいるし，飼いイヌが群れに加わるとまっ先に襲われるという。

パリア犬。イヌ科イヌ属。
絶えまない近親繁殖と環境の影響によって
地方により姿に違いがある。かつてシーボルトが
日本で採集した日本犬には，写真のような
パリア犬の特徴が多分にはいっていた。（上）
PH. B. MALLET-JACANA



パリア犬の母と子。
アジアの街では，野生犬とものらイヌともつかぬ
生活をしている。
残飯や汚物を食べ，ゴミ捨て場を
きれいにしてくれる掃除屋でもある。（下）
PH. W. SUSCHITZKY-RAPHO





アフリカ固有の野生犬

オトキオン　*Otocyon megalotis*

オトキオンは，イヌ科オトキオン亜科オオミミギツネ属のただ１つの種である。オオミミギツネとも呼ばれている。

歯の数に特徴があり，その歯式は，あごの片側でみて，門歯3／3，犬歯1／1，前臼歯(きゅうし)4／4，臼歯３（４）／４（５），と全部で46本から50本で，家犬よりも４～８本多い。しかし，それはどじょうぶではない。

外からみたからだの特徴としては，小さな頭部に大きな耳がついていることで，その大きな耳が，この動物の学名の由来となっている。からだの大きさは，肩までの高さが35～40センチ，体長（以下，頭胴長のことをいう）は50センチほど，尾長が40センチといったところである。毛の色は，黄と灰色の光沢をもった淡黄褐色で，耳，肢（あし），尾の末端は，先のほうが黒くなっており，額にははっきりとした白い太い線が横に通っている。

この動物は，ソマリア，ケニアなどの東アフリカから，スーダン，ザンビア，ローデシアといった南アフリカにかけての乾燥地帯にいる。灌木が茂って，しかも開けている地方に好んですんでいる。これらのやぶのなかのツチブタが捨てていった巣穴や，岩のあいだなどをすみかとして，昼間は眠っており，夜になると咲くような叫び声をたてて，さまよい歩く。

食べ物は，おもに昆虫（こんちゅう）類で，なかでもバッタ，シロアリは好物であり，それに加えて果実と球根などもよく食べている。トビネズミやスナチネズミなどの小型哺乳(ほにゅう）類もつかまえるし，ときには屍肉などを食べる。

見かけによらぬおとなしさ

オトキオンは，見かけほど獰猛ではなく，むしろ，大きさが同じくらいのほかの食肉類にくらべて，穏やかであるともいえる。襲われれば身を守るために戦うが，みずから襲いかかることは珍しい。東アフリカでこの動物を観察したある学者は，「たいへん用心深い動物で，いつも危険に対して注意している」といっている。

おもに夜行性であるが，太陽の光をさえぎる巣穴が見つからないときには，昼でも姿をみせている。いちばん活動的なのは日暮れと夜明けで，１匹でも，つがいでも移動するが，

オトキオン。イヌ科オオミミキツネ属。
この世の音という音はすべて聞いてやる
といった表情で大きな耳をそばだてているさまは
イヌというよりキツネに近い感じだ。（上）
PH. A.-M. ANDERSON N. H. P. AGENCY

オトキオン。
数匹で群れをつくっており
昼間は，他の動物が捨てていった巣穴などにいて
夜ともなると昆虫やネズミ類を求めて活動する。
東・南アフリカの乾燥地帯にすんでいる。（下）
PH. J.-L.-S. DUBOIS

オトキオン。
おとなしい動物で，人間などを襲うことはない。
しかし，逆にそのことは，人間にとって
捕えやすい動物であり，原住民は，においが臭く
強いにもかかわらずその肉を食べる。（右上）
PH. HOLMES-LEBEL



最高6，7匹の小さい群れとして生活している。たぶん，家族単位の群れだろうと想像されている。

妊娠（にんしん）期間は，おそらく60～70日であろうと思われ，とくに12月から4月の間に，1回に2～5匹の子が生まれるようだ。

オトキオンの子どもをつかまえると，飼いならすことができ，子イヌのように飼い主になつくという。アフリカのある原住民部落では，オトキオンの肉を食べるが，それはたいそううまいそうで，皮も装飾品などに利用するという。



オトキオン。
一般では好奇心の強い動物である。
自動車を見るため危険をかえりみず
道路まで出てきたり
〔人〕のあとをついていったりするという。



リカオン。イヌ科リカオン属。
リーダーに指揮されて
数十匹から100匹以上にも及ぶ集団が
雄大な，しかも頭脳的な狩猟プレーを展開する。
アフリカの草食動物がもっとも恐れる敵だ
PH OKAPIA

リカオン
ふつうは群れをなしているが，こくまれには
1匹，あるいはつがいでいる場合もある。
しかし，群れをつくっていないからといって
決しておとなしいわけではない。(右上)
PH P LISSELET ATLAS PHOTO

リカオン
からだに白や黄土色や黒の，独特の斑紋があり
迷彩をほどこしたようになっている
この斑紋は，個体によってみな差があり
親の斑紋は子に遺伝しないという。(右下)
PH J P CHRIS HUNT

リカオン　*Lycaon pictus*



リカオンはイヌ科シモキオン亜科リカオン属に分類され，1属1種である。リカオンの呼び名はたくさんあって，アフリカヤケン，ハイエナドッグ，ハンティングドッグ，ケープタウン猟犬などといわれており，それらの名まえからしても，かなりすごい肉食獣であることを感じさせる。

体長は約100センチ，肩までの高さは60センチ，体重16～23キロといったところである。細いしなやかな四肢（しし）をもち，やせていて，吻（ふん）はとがり，立った耳は大きい。からだの毛は短く，しかもはえ方がまばらなので，はだがすけて見えそうである。額には，鼻の先から額（ひたい）にかけて1本の黒い帯が走っており，耳も黒い。尾はつけ根では黄土色で，中ほどが黒，先は白くなっている。しかし，いちばんの特徴は，なんといってもからだ一面にひろがる白，黒，黄土色からなる斑紋（はんもん）で，迷彩（めいさい）をほどこしたようなからだは，そ





れだけで，相手に恐怖感を与えそうである。また，オオカミやジャッカルとの違いは，四肢（しし）にそれぞれ4本のつめしかないことであり，じゃこうのにおいを発散させることである。

リカオンは，サハラ砂漠の南から，南アフリカまでの，アフリカ大陸の大部分にすんでいる。東アフリカの山のなかで，森林限界の上にまでいることがあるが，ほんとうは草原にすむ動物なのである。しかし，食糧が足りなくなると，非常に広範囲を渡り歩くことがある。昼夜わかたず活動するが，とくに明けがたと夕方は活発で，昼の暑いときは，穴の中ややぶの陰で休んでいる。

頭脳的なハンティングプレー

リカオンは，猛獣がたくさんいるアフリカ大陸の動物全体のうちでも，もっとも獰猛な食肉類だとみられている。ふつう，数匹以上で群れているが，ひとたび獲物をとる狩りを始める際には，100匹以上もが集まることも珍しくないという。しかし，現在では，数が減っているためか，25匹以上の群れというのはあまりみられなくなってしまった。

リカオンの狩りのしかたは，ハンティングドッグといわれる名に恥じないもので，その頭脳的なプレーは，見る人の心をとらえずにはおかない。

シマウマ，ヌー，ガゼル，その他のレイヨウなどの獲物にねらいをつけると，そこへ近づいていく。そしてリーダーは群れを二手に分けて，一群れには獲物を待ちかまえさせておき，もう一群れで追っていく。追いながら，すでにかみ傷で弱らせてあるから，待ちうけている仲間のところへ追いつめたときには，もうそれは食糧になっている。すなわち，まだ獲物が生きているうちに食い裂き始めるので，食われながら出血で死んでいくといわれる。

リカオンはすばらしく足が速いといったほうではないが，とにかく強靱で，獲物を追っていくときには，群れの先頭を絶えず新しい力で固めるためなどで，隊列を入れかえたり

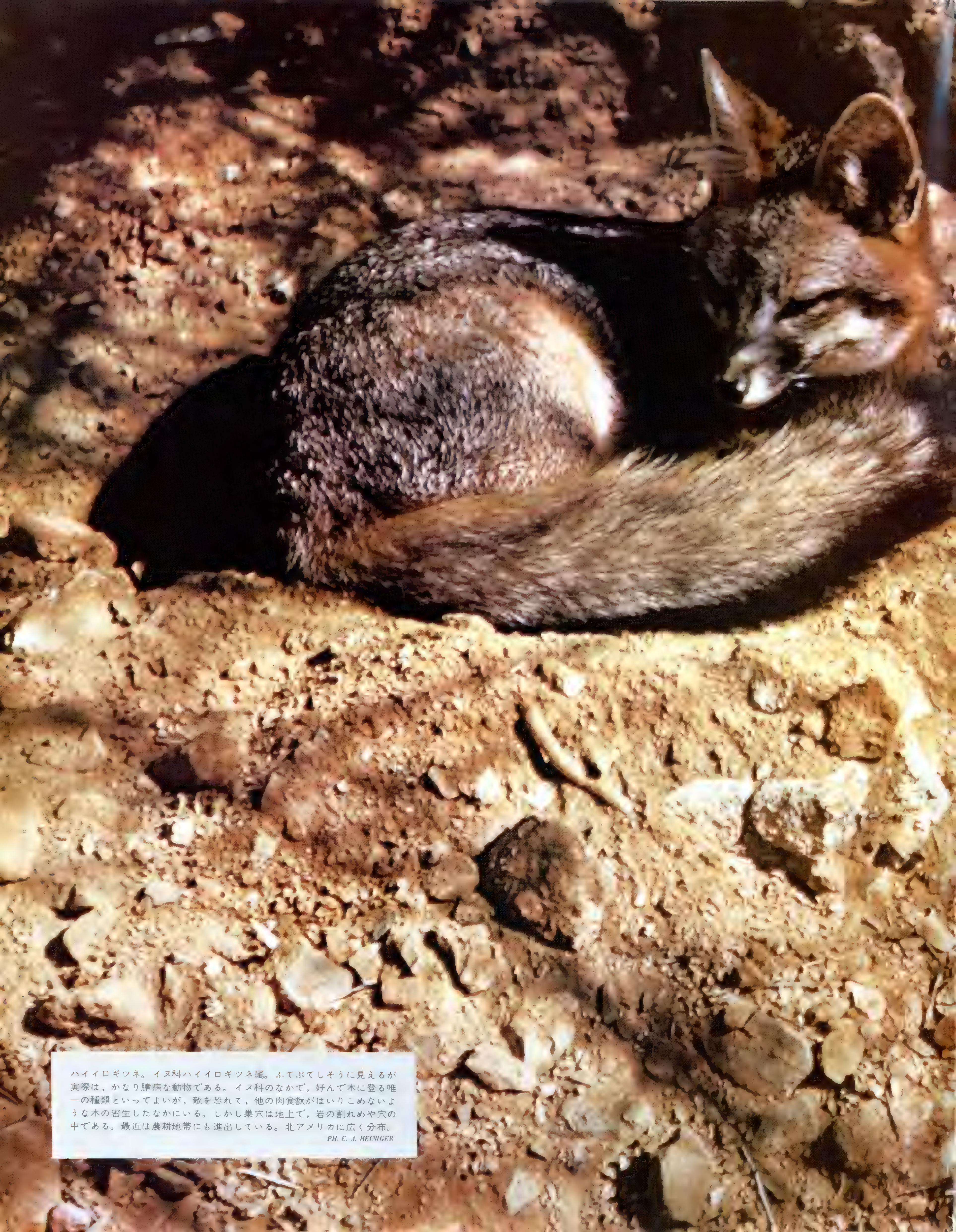


リカオン（イヌ科リカオン属）
攻撃的で，こわさ知らずで，しかも健啖家である
数あるアフリカの食肉類のなかでも
いちばん獰猛ではないかといわれている
ライオンさえも一目おいている（上）
PH. MYERS AFRIQUE PHOTO

リカオン。
足はそれほど速くないが
獲物をあくまでも追いつめるという。
最初は，獲物が立ちどまるまでまっすぐ追い
走りながらかみついては，弱らせていく（下）
PH. PICOU AFRIQUE PHOTO

オトキオン（イヌ科オオミミキツネ属）
そのりっぱな耳は，オトキオンの獲物たちにとってまさに地獄耳である。
発達した聴覚は，地中にいる昆虫や
齧歯類の居場所をぴたりと聞きあてる（右）
PH. J.-M. ANDERSON N.H.P. AGENCY





ハイイロギツネ。イヌ科ハイイロギツネ属。ふてぶてしそうに見えるが実際は，かなり臆病な動物である。イヌ科のなかで，好んで木に登る唯一の種類といってよいが，敵を恐れて，他の肉食獣がはいりこめないような木の密生したなかにいる。しかし巣穴は地上で，岩の割れめや穴の中である。最近は農耕地帯にも進出している。北アメリカに広く分布。

PH. E. A. HEINIGER









する。その強靱さを恐れて，ほかのどんな食肉類に対しても身を守れるレイヨウでさえ，リカオンのほえ声で逃げていくし，百獣の王といわれるライオンも老いたものだと，この群れの前から逃げだすといわれる。

リカオンが狩りから帰ると，あごや胸が血だらけになっているが，なめてきれいにしようとすることもない。水浴もしないようだし，乾燥地帯にいる動物一般と同じように，たまに降る雨水や露で飲料はじゅうぶんらしい。

激烈な英才教育

交尾期は11月ごろで，妊娠（にんしん）期間は63～80日，1回に2～6匹，最大限8匹までの子が，母親がつくった，ツチブタの巣穴をひろげて草を敷いた巣の中で生まれる。生まれたときは目を閉じているが，3週間でとびまわり，5週間で離乳する。子どもの小さいとがった歯は乳ぶさをかみ切ることもある。このころの体重は2.5キロ余りで，子どもたちのあいだでは，食べ物を争って，強いものたちだけが生き残るというきびしい戦いが行なわれる。妊娠（にんしん）すると父親は母親と共同して生活し，生まれた子どもたちの食べ物も捜しにいく。

親は，大きな肉片をかまわず飲みこんで，半分くらい消化したものを吐きだしては子どもに与えるから，それが，リカオンは食べきれないほど獲物を殺し，消化しきれないほどそれを食べるといわれる原因なのかもしれない。

子どもたちが大きくなると，狩りの群れに加わるが，子どもの足ではとうていついていけない。そこで子どもたちは，すでに獲物がしとめられてから駆けつけることになる。子どもたちが到着すると，親たちは獲物から離れて子どもたちに先に食べさせ，ハイエナやほかの肉食獣が近づくのを見張る。

リカオンを小さい子どものうちにつかまえると，イヌのようには飼えないにしても，飼い主がそばにいても逃げたり，攻撃的になったりしないようになる。飼われていてもよく子を生む。寿命は約10年であろう。

ディンゴ。イヌ科イヌ属。
こんなおとなしそうな姿をみると
簡単に飼えそうな気もする。
しかし，そのしなやかなからだには
人をよせつけぬ野性と抵抗力を秘めている。（左）
PH. G. PIZZEY N. H. P. AGENCY

リカオン。イヌ科リカオン属。
この動物の活動する舞台は
アフリカ大陸の草原である。
昼間は木の陰などに隠れており
夕方や夜明けになると獲物を求めて出動する。（上）
PH. MYERS AFRIQUE PHOTO

リカオンの子ども。
すでに迷彩模様ができ始めており
他の動物をふるえあがらせる日も近いだろう。
両親はとても注意深く子のめんどうをみる。（下）
PH. J.-L. S. DUBOIS



アジア固有の野生犬

ドール *Cuon alpinus*

ドールは、イヌ科シモキオン亜科ドール属に属し、1属1種である。アカオオカミとも呼ばれる。体長は90センチ、尾が40センチほどで、尾はふさふさした毛に包まれている。体重は14～20キロ、肩までの高さは50センチ余りである。歯の数は、イヌ属の42本から、いちばん奥の下の臼歯（きゅうし）を1本ずつとった、40本である。また、前肢（ぜんし）にはつめが4本しかないとか、下あごの裂肉歯の構造が似ているなどから、リカオンに近いともいえる。しかし、毛並みなどから共通点を見つけることはむずかしい。

19世紀から20世紀にかけてのイギリスの作家キップリングが、《赤いイヌ》と名づけたこのドールは、密生した下毛の上にまた濃い少し長い毛がはえており、毛の色は北のほうでは夏の間には茶褐色（かっしょく）で、冬には黄色にまで淡（あわ）くなってくる。熱帯に近いほど、毛も薄くなり、色もずっと淡い調子になっている。吻（ふん）は短く太く、四肢はしっかりしている。

ドールは、インド、中央アジアから中国北部、東部シベリア、インドシナから、海を渡ったスマトラ、ジャワといった東南アジアまで分布しており、山岳地帯や森林地帯に生息している。日本にはもちろんいない。分布が広いため、地方によって多少の差もあるので、別種とされることもある。

主として昼行性で、巣には、土のくぼみや岩の合い間といった手軽なものを利用して、自分から巣をつくるといったことはない。そして、いつも3、4匹から、大きいのになると20～30匹といった群れで生活している。こうした群れの仲間は、みな血縁関係にあるものと思われる。

好きな獲物（えもの）は、シカ、アイベックス、レイヨウ、スイギュウ、バンテンなどであり、ときにはヒョウやトラといった大きな食肉類をグループで襲うこともあるという。足は速くないが、長い距離を走ることができる。

妊娠（にんしん）期間はほぼ63日で、2～6匹の子を生むが、その子は、体重300グラムほどで、まだ目は開いていない。熱帯地方では、年間を通じて生殖するが、寒い地方では1、2月に多いようである。子の成長は早く、10日で体重が倍となり、1か月で1.5キロ、6週間で3キロ、2か月で5キロとなり、1年たつと性的に成熟してしまう。

ドールは攻撃的で、しかし勇敢な動物であり、家畜を襲うのが災いして、人間に狩られる対象となっている。肉は食べられず、毛皮の値うちもない。

タヌキ *Nyctereutes procyonides*

タヌキは、イヌ科タヌキ属に分類され、英語ではラクーンドッグ（Raccoon dog）〔アライグマのようなイヌ〕といわれている。事実、タヌキはイヌよりも外見がアライグマ〔アライグマ科〕によく似ている。

体長50～65センチ、尾長は15センチほどであり、肩までの高さは30センチ、体重5～7キロ余りである。そのやや長めのからだは、あまり強いとはいえない肢（あし）でささえられている。吻（ふん）はとがり、目の周囲に黒いくまどりがあり、短い尾には柔らかい毛がはえている。毛は灰褐色で、腹よりも背のほうが濃く、首に大きな灰黄色の斑（はん）がある。

タヌキは、シベリア東部、中国、朝鮮、日本が原産地で、北ヨーロッパなどには移入した種の野生化したものがいる。

日本人にとってタヌキという名まえは身近で、とくに人を化かす動物とされている。分福茶釜や、大入道や娘さんに化ける話は枚挙にいとまがない。しかし、タヌキの知能は、イヌやキツネにくらべて劣っており、同じ人を化かす話でも、キツネと比較すると、どこか警戒心を忘れたようなユーモアがある。あまり驚くと、一種の仮死状態となり、いわゆる《たぬき寝入り》となる。

タヌキの活動するのはおもに夜である。昼間は、地面のくぼみや岩の裂けめ、木の穴、ほかの動物が捨てていった巣穴などにひそんでいる。たまには自分で巣穴をつくることもあるが、その場合は、滝や川でさえぎられた、木のおい茂った森のなかなどである。そこには1家族、5、6匹という小さな集団ですみ、夜は獲物を狩り、昼間は、丸くなって自分の厚い毛皮に鼻を埋めて眠っている。

食べ物は変化に富んだ献立である。小さい

イヌ科ドール属
アカオオカミともいわれ、東南アジア、インドから北アジアにまで分布している。性質はすこぶる獰猛で、オオカミのように群れをなして獲物に襲いかかる。
PH. I. MOKHIM



齧歯（げっし）類から、ザリガニ、ヘビ、カエル、魚、貝類や、ビワ、カキ、ブドウといった果実、イモ類などを食べている。キツネと同じく魚とりがうまいようである。冬が近づくとたくさん食べて、からだに脂肪をたくわえるから、夏の1.5倍にもなるものがある。

寒い地方にいるタヌキは、イヌ科のなかでただ1種だけ、冬になると、クマと同じような不完全な冬眠、すなわち穴ごもりにはいる。体温はほとんど変わらないから冬眠とはいえないもので、たくさん脂肪をためこんだもの は、冬でも外に出ている。

妊娠（にんしん）期間は60～63日で、発情期は1～3月が多い。1～8匹の子を生むが、ほかの食肉類と同じように、あまり発育しない状態で生まれてくる。生まれたては60～90グラムで目は見えない。発育は早く、10日ほどで目が見えるようになり、2か月過ぎると乳を離れ、4、5か月たった秋には、ほぼ成獣の大きさになる。性的な成熟は翌年の春になってからである。

タヌキの肉は、むかし、シベリア、中国、日本などでは、ずいぶん食べられていたようである。日本に「たぬき汁」ということばがあるように、かなりひんぱんに食膳（しょくぜん）にのぼっていたと思われる。しかし、タヌキの肉は臭いから、あるいはイタチ科のアナグマの肉だったかもしれない。また、毛皮は防寒具や帽子などに使われた。

子どものときに捕えると、かなり飼いやすい動物である。好物の魚をえさにして、手なずけることができる。また、かわいたきれいなところが好きで、自分の寝る場所はよごさない。

エゾタヌキ（イヌ科タヌキ属）タヌキの亜種
日本の北海道にいてなじみの深い動物である
野生のイヌというには、あまりにもとぼけた
相手であり，イヌとして扱うのはむりであろう
北海道阿寒にて。本州産をホンドタヌキという
（撮影・岩合[illegible]）





タテガミオオカミ。イヌ科タテカミオオカミ属。
ほろびつつある動物である。
ブラジル，ボリビア，パラグアイ境界の
南アメリカの草原や高原に
1500～2000頭が生存している。（上）
PH. OKAPIA

タテカミオオカミ。単独生活をしているが
春の交尾期ともなると，雌を選ぶのに熱心になる。
しかし，同種の個体間でもおとなしい動物なので
雄どうしが雌を争うといったことは珍しい。（下）
PH. OKAPIA

アメリカ固有の野生犬

タテガミオオカミ

Chrysocyon brachyurus

タテガミオオカミは，イヌ科タテガミオオカミ属に分類され，首から背中にかけて黒いたてがみのような毛がはえているので，この名まえがついている。系統的には，キツネに近い動物で，キツネ，ジャッカル，オオカミなどと同じように，前肢（ぜんし）に5本の指があり，裂肉歯もリカオンやドール，オトシオンなどとは異なっている。

四肢（しし）が長いので，逆にからだが短くみえるが，実際には，オオカミと同じくらいの大きさである。体長125センチ，尾長30センチ余り，肩までの高さは75センチ余りである。四肢が長いだけあって，速いスピードで走る。吻（ふん）は長くのび，からだの毛は柔らかくて，しかもわりあいに長く，首から肩にかけては，10センチ余りのたてがみがあり，これはさか立てることもできる。全体の色の調子は肉桂色のつやのあるくり色で，腹







タテガミオオカミ。
とにかく腰が高く肢の長い，いかした動物。
それにまた，たてがみの黒と肢の黒いブーツが
なんともいえないおしゃれである。（下

PH. F. PETTER

のほうはやや黄色くなっている。四肢は黒いが，すねだけは，だいたい白くなっている。

分布は，南アメリカのブラジル，ボリビア，パラグアイが境を接している地帯から，マート・グロッソ高原にかけての草原である。現在1500から2000頭が生息していると思われる。

夜行性で，しかもほとんど単独生活をしているから観察するのはむずかしい。野性的でありながらかなり臆病だから，人の住んでいるところは避けており，家畜を襲うこともないが，草原に迷いこんだヒツジやヤギはときに襲われることもある。

食糧は，齧歯（げっし）類，鳥類，爬虫（はちゅう）類，昆虫（こんちゅう），軟体動物である。また，蜜，サトウキビ，バナナ，球根，根なども食べる。

背が高いので，遠くから獲物を見つけることができるし，またジャンプ力もすばらしい。しかし，前肢（ぜんし）が後肢（こうし）より少し短いので，傾斜を登るのはとても速いが，降りるのはやや劣るようである。タテガミオオカミを狩るときには，起伏のあるところへ誘いこむのがよいことを狩人は知っている。この動物は，闘争的ではなく，また同種の個体間でも争うことはめったにないし，それどころか，他の動物に襲われた仲間を助けようとしたのを見た人もいる。

交尾期は冬か，あるいは4，5月ごろで，ふつう2，3匹の子を生むが，生まれた子のからだは灰色をしている。

よくうなり，ほえて騒々しい動物だが，よくなれて飼いやすく，12～15年くらい生きる。

タテガミオオカミ。
肢の長いばかりが能じゃない
とは，決してひがみのことばではない
斜面を登るのは速いが
降りるのはへただからである。（上）

PH. OKAPIA



カニクイイヌ *Cerdocyon thous*

イヌ科カニクイイヌ属に分類され、その和名はカニを食べるところからきていると思われるが、からだつきや習性はキツネに似ており、《森のキツネ》ともいわれている。

頭部は短くて幅が広く、吻（ふん）はとがり、耳はそれほど大きくないのが離れてついている。目じりはつりあがって茶褐色の虹彩（こうさい）と横に長いひとみがある。体長は65センチ、肩までの高さは55センチ、尾は30センチほどである。毛はこわくて、それほど長いわけではなく、下毛もあまり密生していない。色は背中で灰色がかった淡黄褐色、腹のほうへいくにつれて、黄、ときには白になっている。

カニクイイヌは、南アメリカのコロンビア、パラグアイ、およびアルゼンチンの北部にいたる草原や森のなかに生息している。単独で生活しているが、ときにはつがいのこともあり、おもに夜行性なので、昼間はほかの動物が捨てていった巣穴の中で休んでいる。おとなしい動物なので、人間とか、あるいは大型の哺乳（ほにゅう）類を襲うといったことはまずない。

食べ物は、小型の齧歯（げっし）類、バッタなどの昆虫（こんちゅう）類、トカゲやカエル、カニなどで、くだものもメニューにはいっている。また、うまいぐあいにつかまえられたときには、鳥も食べるし、カメの卵も遠慮しない。

飼ってみると、その行動や性格などは、キツネはもちろんジャッカルにもよく似ている。出産は3～8月ごろで、1回に2～5匹の子どもを生む。その子たちは、飼いイヌと同じように、実に育てやすい。

ナンベイキツネ

Dusicyon culpaeus

イヌ科アザライヌ属〔ナンベイギツネ属ともいう〕に属しており、ナンベイハイイロギツネともクルペオとも呼ばれている。この動物は、オオカミ、キツネ、ジャッカルなどと形態的特徴がよく似ている。

すなわち、大きな耳、先のほうが黒くなった尾、豊かな体毛といったぐあいにである。

毛の色はいろいろあるが、多いのは、背中と首とが黒く、わき腹が濃い灰色、胸と腹はクリームがかった黄色である。毛は柔らかく、きれいな下毛と、かなりざらざらしたウェーブのついた粗毛から成っている。

分布は、南アメリカのパラグアイ、アルゼンチンなどであり、この地方では、山地でも平野部でも、いたるところでお目にかかれる。しかし、どちらかといえば、暑い地方でも温暖なところを好むようで、アンデス山脈の4000メートルものところにもいる。この動物はとくにパラグアイに多く生息しているようで、森でも、木のないところでも、開けた平原でもおかまいなしにすんでいる。夜行性で、昼間は齧歯（げっし）類のつくった巣穴で過ごしている。

食べ物は、齧歯類と果実で、雑食性である。地中の齧歯類を見つけるために、地面に鼻をこすりつけるようにして狩りをする。ヨーロッパのアカギツネのようにすぐれた記憶力をもっており、一度ニワトリ小屋に押し入ると、2回めからは、迷わず前回はいった道をそのまま利用する。

また昼間でも、安全を確認すると狩りに出

ナンベイキツネ。イヌ科アザライヌ属。
大きな耳、とがった吻、ふさふさ毛のはえた尾などキツネにそっくりな動物で
南アメリカのアルセンチンやバラクアイなどではどこでもお目にかかれる。

PIL F PETTER



かけるし、沼地では、アヒルなどの水鳥をあさったり、小鳥もつかまえてしまう。しかし奇妙な習性をもっていて、人間に見つかってびっくりしたり、逃げるひまのないときには、タヌキがするように、死んだみたいになる。

アルゼンチンの牧羊主たちは、これを害獣として情け容赦(ようしゃ)なく狩っている。しかし、ナンベイギツネに近縁なフォークランドオオカミ(*Dusicyon australis*)が、19世紀の末にほろびたように、これも滅亡が予言されている。

ハイイロギツネ

Urocyon cinereoargenteus

イヌ科ハイイロギツネ属に属しており、キノボリギツネとも呼ばれている。それは、イヌ科の動物には珍しく、木登りをするからである。

体毛はかなりあらい毛だが、体色は、この動物の名まえにもなっていて、ぼかしたようなきれいな灰色である。毛の根もとは白くて先のほうが黒くなっており、それがこの色調をつくりだしている。ときには、いちだんと黒くなった線が、からだの上部から尾までのびていることがある。また、顔と四肢(しし)に黒い線のあるものもいる。そして、ほお、のど、腹部などは黄色みを帯びた錆色(さびいろ)か白であって、体長60センチ、尾長40センチ、肩までの高さはおよそ30センチといった大きさである。

元来の分布域は、北アメリカの北と北西をのぞいた地域から、メキシコ、中央アメリカ、南アメリカのコロンビア、ベネズエラまでである。しかし、最近では、北アメリカの五大湖の北、カナダのオンタリオ地方にも姿をみせており、だんだん北のほうへ分布域をひろげている。

生息の場所としては、森のなかでももっとも木の茂ったところが好きで、自分よりからだの大きい食肉類がはいれないようなところにいる。そして、もしイヌなどに追いかけられたりすると、得意のキノボリで木の上に逃げてしまう。

秋風とともに家族離散

夜行性だから、昼間は、自然にできた穴や岩の割れめ、木の穴などにすんでおり、夜ともなると活動しはじめる。とくにウサギやネズミなどの齧歯(げっし)類を熱心に追いかける。また、ウズラに対しては、ネコのように風下から用心深く近づいて、飛びたつ直前にとびかかってつかまえてしまう。食べ物のないときには、倒木とか、腐りかけた木の周囲をつめでひっかいて昆虫(こんちゅう)をつかまえては食べるし、トカゲも食べている。また植物は、よくうれた果実や、野菜類を好んで食べる。

妊娠(にんしん)期間は63日前後で、子は春に生まれる。1産に2～7匹だが、ふつう3、4匹といったところである。6週間たつと子はなんでも食べ始め、10週間ではほとんど離乳してしまう。そして、子が大きくなる夏の終わりか、秋のはじめには、家族はちりぢりに別れていく。しかし、子が去ったあとも、親たちはいっしょにいる場合もある。冬になると、タヌキと同じように、穴にはいって眠る。

ハイイロギツネの毛皮は、ほかのキツネのようにいやなにおいがしないため、たいへん珍重(ちんちょう)されている。

ハイイロギツネの変種の1つに、キシベハイイロギツネ〔キシベキノボリギツネともいう〕(*Urocyon littoralis*)というのが、カリフォルニア沿岸の沖の島々にいる。

ハイイロギツネ（イヌ科ハイイロギツネ属）
ヨーロッパのアカギツネにくらべると
尾は長いが、からだは小さく、しかも肢が短い。
食べ物として、ウサギ、ネズミ、昆虫などを
熱心に追いかける。
PH. HOLMES-LEBEL



ハイイロギツネ．イヌ科ハイイロギツネ属。
名まえのとおり，美しい灰色のからだをしている．
ときに，根もとが白く，先の黒い毛は
からだの上部から尾にかけての黒い線となる。
ほお，のど，腹は黄みを帯びた白っぽい色である．
PHIL A. MISTORSKI

イヌの感覚

——その超感覚を探れば——

内田　亨

イヌの感覚と人類の感覚とをくらべてみると、だいたい3つの大きな差異がある。第1は、イヌのほうがはるかに嗅覚がすぐれていて、人類が感ずることができない、かすかなにおいでもイヌはかぐことができるということ。第2は方向感覚で、人類は地図や磁石にたよらないと、いま通ってきた場所の方向もわからないが、イヌは、その方向感覚によって元の場所に帰れるということ。第3は、人類のほうが発達している点で、イヌはほとんど色盲だということである。イヌにとって、この世は白黒写真をながめているようにしか見えない。

もちろん、そのほかにも違いはあって、聴覚はイヌのほうが鋭く、味覚は逆に人類のほうが発達しているといったぐあいで、その他の感覚も多少の差があるが、とくに、さきにあげた3つの感覚ほどは大きな差ではない。

人間の10億倍も鼻がきく

イヌの嗅覚がどのくらい鋭いかを、脂肪酸を用いて実験したドイツの生理学者がいる。それによると、人間の100万倍から10億倍くらいの鋭さがあることが確かめられている。

このような嗅覚の差は、やはり鼻腔内の構造の違いによっている。イヌの鼻腔は、人間にくらべると、そのからだの大きさに比較して広く、また鼻腔の内部の表皮のひだが非常に複雑になっていて、人間のように簡単ではない。

鼻腔の表皮のひだが多いということは、吸いこんだ空気と表皮との接触面が多いということであり、表皮の上層には、人間の鼻腔内の嗅覚細胞よりはるかにたくさんの細胞が並んでいるから、それゆえに嗅覚が鋭いのである。

その鋭い嗅覚を利用したものに、警察犬として犯人の臭跡などを追わせるものがあり、よく効果をあげている。人間には、みな個人のにおいがあるから、犯人が落としたと思われる手袋でも鉛筆でも、ほんのちょっとした所持品があれば、そのにおいをかがしてから犯人の臭跡を追わせる。イヌは、犯人が通ってから数時間以上あとでも、空気中あるいは草原、または地面に残っている犯人の個人臭をかいで、そのあとをつけていく。

飼い主の手紙に喜ぶ

木切れを遠くに投げて飼いイヌにとってこさせる，という光景はよく見るし、また、なにげなくやっていることでもある。何度も投げている木なら，飼い主のにおいがよくついているから問題ではないが，新しいのをちょっと握っただけで，しかも同じような木切れがたくさんあるなかに投げ入れた場合でも，飼い主が投げたものをまちがいなく持ってくる。人間なら，このような場合に視覚で区別するが，イヌは1，2秒飼い主が持って，その間についたにおいをかいで，他の木切れと区別するのである。イヌの嗅覚に比較すると人間の嗅覚などごく鈍いものである。

こんな話がある。飼い主が旅行をしているとき，留守番をしている奥さんのところに4，5通の手紙がきた。そのとき部屋にいたイヌが，そのなかの1通のにおいをかいで，尾を振って喜びを表わしていた。その手紙は，もちろん飼い主からのものであった。

わたしにもそんな経験がある。あるとき，旅行先から夏のコートを家に送り返したことがある。家内がそれをひろげて掛けたところ，飼いイヌがその下にきて尾を振ってかわいかったといっていた。これも親しいにおいだったからだろう。

食べ物も，味よりにおいで選ぶ。イヌの嗅覚をきかないようにしてしまうと，食べ物をとるのが不便になる。たとえば，干してかたくなった肉片を入れた牛乳を与えたところ，牛乳だけ飲んで，肉片はそのまま残したとのことである。嗅覚を働かなくされた子イヌは，母親たちの寝小屋へ帰りつくことができない。

乳離れをしたばかりの子イヌをもらってくると，夜になって1匹だけになったときに，やかましく鳴いて困ることがある。人間が相手になってやればおとなしくなるが，そうもいかない。こういうときには，子イヌをもらってくるのといっしょに，母親の寝小屋のわらなどを少しもらって新しい寝小屋に入れておくとよい。寒いときであれば，人の体温よりやや高いくらいの湯タンポといっしょに入れてやれば，もとの寝小屋のにおいをかぎ，母親のあたたかみを感じて，すやすやと眠ることが多い。寝小屋のわらでなく，よくなれた前の飼い主のにおいがついた品物でもよい。

よく，イヌ1匹だけに留守番させて飼い主が長い間帰らないと，飼い主の衣類などをかみ裂いてボロボロにしてしまうことがある。これは1匹だけで留守させたためにイヌがおこったとか，駄々をこねたという人があるが，そうではなくて，飼い主から離れているうちに飼い主を恋しくなり，飼い主のにおいがしみついた衣服などで遊んでいるうちに破いてしまうのである。決して腹いせをしているわけではない。そのことは，親しくない人の衣類があっても，それには触れないのである。

鼻で組み立てられた世界

人間が色彩感覚を伴った視覚でもって世界を見ているのにくらべ，イヌはその嗅覚でこの世界を感じている。人とイヌとがいっしょにいても，両者を取り巻く環境はすっかり異なったものに受け取られている。たとえば1つの部屋の風景も，人間なら机や椅子の形やカーテンの色などを気にしているのに，イヌのほうは，この部屋に新しい人のにおいがするから客があったとか，ネズミがときどき走るとか，を感じているのである。

イヌを連れて野原へ散歩したとする。飼い主のほうは，野の美しい花などに気をとられているのに，イヌのほうは，地上のにおいをかいで，少し前に他のイヌが通ったとかいうことに気をとられているはずである。しかし，イヌは，飼い主といっしょにいて，他のものがいないのでうれしい，という心の状態であることは事実である。

イヌを連れて歩くと，雄イヌはよく後肢をあげて小便をする。あまりたびたびして小便が出なくなっても，同じような

—→ *

カラーページ注

〔注1〕　**野生犬**　家犬を家畜としてまとめ，それに対する野生犬という構成をした。局地的であり，その地方固有の分布をする種類をここであげ，キツネ類，あるいは野生のイヌ属でオオカミなどのように広く分布するものをあとにした。分類上からいえば，オオカミ，ジャッカル，コヨテなどのイヌ属が，ディンゴ，パリア犬の次にくるものである。

〔注2〕　**パリア犬の類似犬**　類似したものにパプア犬（Papua dog）がある。その名まえはあまり知られていないが，動物学者のテュビィが，ニューギニアから報告している。半野生であり，からだの色は，黒地に白斑が対称的に出る特徴がある。胸，四肢の先端，尾の先は白い。台湾の高砂犬，熱帯諸島で半野生となっているものに，この種が多いようである。

ほとんど文献には出てこないが，わたしは，これらを総称してパプア犬と呼びたい。本邦のイヌも，この種のものが多少はいっていたと思われる。

〔注3〕　**パリア犬が飼いイヌとなる**　幕末に来日したシーボルトは，長崎の街犬の骨格を持ち帰ったが，それによるとだいぶパリア犬の特徴をそなえているのである。パリア犬の一部が人に飼われて，飼いイヌにまで改良された可能性は大きい。■　（内田　亨）

日本のタヌキ

——エゾタヌキとニホンタヌキ——

日本には2亜種のタヌキがいて，1つは北海道にいるエゾタヌキ *Nycterutes procyonoides albus*，もう1つのほうは本州，四国，九州に分布するニホンタヌキ *Nycterutes procyonoides viverrinus* である。カラー本文中で種としてのタヌキの説明をしたが，日本のタヌキもそこで述べた特徴をそなえている。



ニホンタヌキ　鳥取県大山山麓　撮影　岩合徳光

エゾタヌキとニホンタヌキとの違いは，エゾタヌキのほうがややからだが大きく，毛が密であることである。

日本のタヌキは，山地から平野と広く分布していたものであるが，現在では生息地域は人間の手によってどんどんせばめられている。巣穴は，つめが短いので自分で掘ることができず，キツネやアナグマなどの捨てた巣や，木の根元の穴，岩の割れめといったところである。巣の近くには便所であるためぐそという糞堆をつくっている。

夜行性だが昼間出てくることもあり，人家近くまで出没する。北のほうでは冬になると仮りの冬眠にはいる。果実などを求めて木登りもする。

ムジナというのは実はタヌキであり，アナグマも混同されてタヌキと呼ばれていることがある。毛が柔らかいので，筆や歯ブラシに使われる。飼うと，イヌのようにからだを揺すって喜びを表わすようになる。■

ヒグマと2人のイノシシ 32

オンコの特訓

畑　正憲

朝の日課はどんべえの散歩から始まる

イヌ用の細い鎖をつけて戸を開けると、どんべえは玄関の敷居に両手を揃え、首をもたげ気味にして、しきりに空気の匂いを嗅ぐ。天を仰いで運命をうらなっているようだ。耳はピタリと後に伏せている。背の毛は逆立てていない。

このためらいの時間は，先に僕が外へ出た場合には比較的短くて済む。僕を慕ってとびかかり，長ぐつにじゃれる

走ると必死でついてくる。先へ先へ出ようとするから，僕の足にまといついて走り難いことおびただしい。

「よいしょ，よいしょ」

しばらく，僕の口からはずんだ掛け声が出る。

最初のうち，どんべえは絶対に遠くへ行こうとしない。きっちり10坪の小さな家にそって，何度も何度も回る。それも連続してまわるわけじゃない。1度か2度回って家の中に駆けこむ。それからまたギャロップである。

しばらくそうしているうちに，どんべえのからだの中に山の霊が舞い下りる。もう無我夢中，一途に興奮して黒い弾丸になるのである。

こうなると名前を呼んでも上の空。彼女の体力が消耗するのを待つしかない

この点，首輪というのは実にうまく出来ている。こちらがへばりそうになったら，ちょっとだけきつく引っ張ればよい。クマの首もしまるだろうが，何よりも僕の体重を後につけているので疲労が早いのである。

しかし，首輪を極度にきつくしめるのは避けた。クマといえども，首をしめるのは呼吸困難に結びつく。

クマは頑丈な動物で，さわればさわるほど闘争に適したからだをしているのに驚かされる。四肢，背，腹，頭――どこを手荒に扱ってもビクともしない。弱点がもしあるとすれば，それは気管である。首筋を撫でると，皮膚のすぐ下に気管があり，指でつまみ圧しつぶせる感じがする位だ。しかも腹側にあるので，クマとクマが喧嘩する際，両方が立ち上がっていがみあった後で，片方がガブリと喉に食らついたら致命傷にもなろう。

ここに弱点がある限り，たとえ100キロになろうと，僕は暴走を食いとめることが出来るかもしれぬ。これから，もしどんべえが反抗するようになったら，首輪でコントロールするのはやむを得ぬ

どんべえは木にも登るようになった。爪というより，抱く力で登っていく。枝が適当な高さにあれば，前足の大きな爪をも利用しはする。

けれど最も頼りにするのは口である。前足の強い力で木を抱いて前進し，枝を発見したら口でくわえる。そこを安全な支点として前足で前をまさぐっていった。

僕はクマについてさほど知識を蒐めていないので，ヒグマが木に登るのはごく当たり前のことだと思っていた。ところが，これがそうでもないらしい。新聞に犬飼哲夫氏が談話を発表していたが，登別のヒグマが木に登る写真を見て，世界中の学者がびっくりしていたそうだ。

同じ頃，北海道新聞に木の枝から撃ち落とされたヒグマの子の記事が出ていた。各地にクマ牧場が出来てヒグマの値段が暴騰しているので，その猟師は何とかしてつかまえようとしたが，追いつめられた子グマの形相のものすごさに気圧されてついに撃ち殺したという。

後に，読売新聞の読者の写真第1位にクマが木に登ったものが当選した。これは野生のヒグマの木登りを記録した唯一のものであるらしい。その評に，幼体であるのが惜しいと書かれていたが。

何故ヒグマは木に登るのだろうか　単なる好奇心のためか。子グマの遊び心のせいだろうか。それとも，梢からはるか小手をかざして，北海道へ押し寄せるカニ族を見物するためだろうか。

僕の脳裏には，多摩動物園での絵が焼きついていた。そこではヒグマとツキノワグマが一緒に飼われ，問題なくヒグマ



よいしょ，よいしょ　畑さんの掛け声でどんべえは浜を走る　海も空も青い

＊ ———→

動作を繰り返すことがある。小便をするのを気をつけてみていると，する前に，まずその場所のにおいをかぐ。このにおいをかぐ動作にはいろいろな意味があるが，多くの場合は，他のイヌのにおいをかぐことであり，とくに他のイヌの小便のにおいが残っている所をかいでいる。

これは，小便をする行為といっしょにして考えてみると，小便をすることは，自分のテリトリーであることを他のイヌに示すことであるとされている。だから，においをかぐというのも，どんなイヌがここをテリトリーにしているか，あるいは通ったかがわかることになる。それゆえ，そこを通るイヌは，みなきまったところに小便をするようになる。イヌの定まった散歩道，すなわちその行動範囲がテリトリーとなる。気の弱いイヌだと，他の雄イヌの小便を避けていく。

わたしがイヌを飼っていたとき，よく他のイヌが門にきては小便をしていった。わたしのところのイヌが散歩に出ているときには，そのイヌは門の中にまではいって，ふんをしていったこともある。イヌどうしのあいさつとも考えられるが，ともかく，自己の存在を他のイヌに知らせようという，テリトリー以外の意味もあるのではないかと思われる。

第六感？―方向感覚

イヌは本来，半夜行性あるいは夜行性だったから，物体の色に関心がなくてもさしつかえない。家畜となってからは飼い主の生活に従うようになったので，昼間活動して夜寝るようになったが，それでも昼間もよく眠っており，夜もまた仮眠の状態だから，わずかな音や，知らないにおいなどが近づくとすぐ目ざめる。

このために番犬となるのだが，家畜となって昼間活動するようになっても，色彩を区別することはできない。しかし，暗い所でものを見る明暗視については，人間よりも発達している。夜，イヌの目が光線にあたると光ることから考えても，イヌの目は反射光線を利用する構造になっているのであろうと思う。

次に方向感覚であるが，ドイツのミュンヘンで行なわれた実験がある。まずイヌを小屋ごと自動車にのせ，そのまわりにおおいをかけてイヌが外を見られないようにし，6キロ離れた場所まで運んで放した。この場所はイヌにとってはじめてのところであった。放されたイヌははじめの30分ほどは不安そうにほうぼうを見ていたが，そのうちにおちついて，自分の家のある方向の空を見つめると，いちもくさんに走りだした。多少回り道もあったが，ほぼいちばん短い道順で，1時間8分で帰ってしまった。同じ場所から，同じ実験を繰り返すたびに，帰る時間は短縮された。

日本でも，昭和の初期に，信州の田舎から形のよい日本犬の成犬がよく東京に買われてきた。日本犬の成犬は元の飼い主を慕って，新しい人にはなれないから，東京を逃げだしては数日，あるいは10日ぐらいのうちに元の家にたどりつくという例があった。このイヌは，もちろん汽車で東京へきたわけだから，まったくはじめての道を通り，野山を越え，川を渡って故郷へ帰ったわけである。

このような動物の性質を帰家性といっており，鳥が巣に帰るのもそうであり，伝書バトはこの性質をよく利用したものである。

イヌの帰家性も実際に利用することができる。たとえば，昼間のうちに数キロ離れたところへ飼い主といくとする。そうすると，帰りは夜になってまっくらになっても，飼い主はイヌの綱を握っているだけで家に帰れるというわけである。これはイヌの方向感覚によるものである。この帰家性は，昼間でも，道のない草原や砂漠などで利用できる。この方向感覚についてはいろいろと議論されているが，今のところはっきりつかめていない。人類にない感覚なので研究が困難である

鈍い味覚

イヌの味覚は鈍いらしい。口はものをくわえたり，ものを持ち歩いたりするので，人間の手の役目をしているから，味覚があまり鋭くては生活に困る。からだを舌でなめて掃除したり，塗った薬をなめ

の方が強いので、見物客が食物を投げる餌場はヒグマに占領されている。しかし空腹に耐えかねたツキノワグマが餌場に近づくと、すさまじい闘争が起こる。

これは一種の魂をゆさぶるショウでもある。人が失って久しい野獣のものすごさが身にしみる。

負けるのは決まっている。ツキノワグマである。威嚇され、追っ払われ、安住の地は木の上である。

島の家のやや西寄りに、僕は柱を1本立てて貰っていた。その家を手がけた大工の鈴木さんはよき隣人でもあり、

「よし、クマっ子が登るなら、かじってもいい木にしましょう」

と、オンコの木を床下から天井のハリまでぶっ通してくれた。

オンコは北海道特有の呼び名であり、本名はイチイ。アララギともいう。

オンコは品位があり、かたい木である。戸外に放って置いても腐らぬし、これで作った船具は終生使えるという。島の家の横にある生まれて初めて持った船の捲上機も、このオンコで作ってある。

余談になるが、オンコがクマに関係がなくもない。この木には赤い実がなり、なかなかの美味だと聞いているが、朝日新聞社の『北方植物園』にはこう書いてある。

「北海道大学植物園のクマは、この実を食べると、必ず種を出す。種に毒があるからだが、小さい時からオリに入れて育てたクマがどうしてそれを知るか不思議だ、と大学の先生たちも首をかしげている」

シェークスピヤの名作『ハムレット』で、王の耳に流しこまれた毒もイチイから取られたそうだ。

余談ついでに書きとめて置くなら、このオンコの種を出した北大植物園のヒグマは、今年殺されてしまった。

新聞で大きく扱われたのでご存知の方も多いだろうが、遊びにきた少年の手首を咬み切ってしまったからだ。その後間もなく毒殺されてしまった。

ニュースを耳にした時、僕の胸は痛んだ。何故、どうして、クマが毒殺されねばならないのか。新聞には、研究用としての一応の使命は終わったと発表されていたが、かたいしこりが心の中に残らざるを得ぬ。

オリに入れられたヒグマの側へ近づき、ヒグマについて知識の乏しい少年が手を差し出せば、傷つくのは常識ではないか。その常識が守られなかったことを責められるのは致し方ないが、何も、本当に、絶対に、ヒグマが毒殺されねばならぬいわれはない。僕はしばし目をつむり、あわれなヒグマの冥福をいのる。

さて僕は、どんべえがオンコの柱をよろこんでくれるものだとばかり思っていた。あの執念深さなら、登っては落ち、落ちては登り、日ならずして柱登りの名人になるだろうと予想した。

そこで、もう1人のイノシシに、

「どうだい、賭けをしないか。いつどんべえが天井に届くか」

「いいわね」

「おれは4日か5日……遅くっても1週間だと踏んでるのだが」

「ダメよ、そんなのじゃ。キッチリ何日と言わなければ」

「では6日」

「それでは……わたしの方はもうちょっと、12日といきましょう」

賭けには勝たねばならぬ。勝たねば真の隊長としての面目が丸つぶれである。

ところが、どんべえは柱に抱きついて興味は示すのだが、一向に登ろうとしない。扉を開ける際の執念深さは影をひそめてしまっている。



朝の日課はどんべえの散歩から始まる

3日、4日と経つうちに、僕は焦った。こうなれば、特訓をほどこすしかない。率先して登ってみせたり、尻を押してみたりしたが、どんべえは前足をやんちゃに振って柱から遠ざかる気配さえみせた。■

てしまうのは、味覚が鈍いためである。

聴覚は人類よりも鋭い。人類が3メートル以内でしか聞けない音も、イヌは24メートル離れて聞くことができる。よく、イヌの遠ぼえのしたあとで火事のサイレンが聞こえることがあるが、イヌのほうが先にサイレンの音を聞いているわけである。というのは、一般の人で1秒間に1500サイクル、最高でも2万サイクルの音が聞こえるわけだが、イヌだと3万サイクルまでは確実に聞くことができ、7万から10万サイクルの高音も聞くことができるといわれている。しかし、イヌはメロディーを覚えることはできない。これは脳の問題である。

よくイヌのことばということがいわれるが、イヌの発する声は喜びや悲しみ、あこがれ、警戒などをその場面に応じて発するだけであり、他に伝える意思をもつものではない。この点で人間のことばとは違う。しかし、遠ぼえとか、警戒のほえ声などになると、群生していたころの仲間への伝達の一種であって、そこではことばの意味に近づいてくる。■

夜空の動物たち 2　ゼウスの使者の〝わし〟と音楽家を助けた〝いるか〟

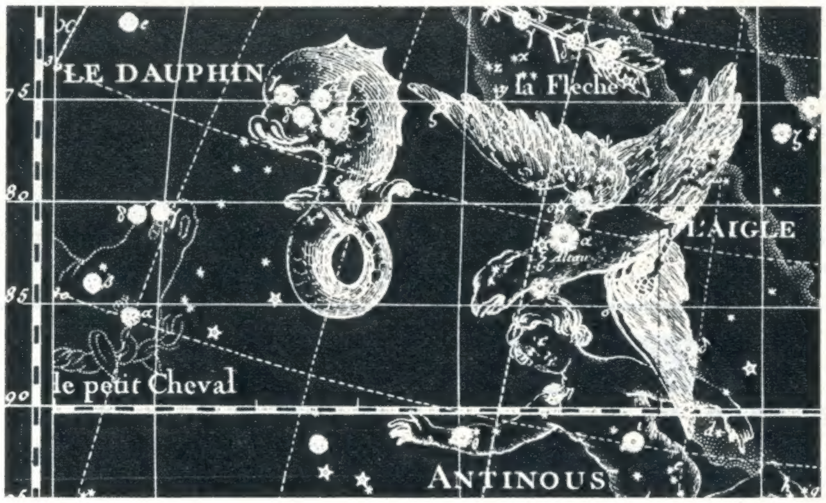
水野良平

天の川を少し北に昇っていくと、「わし座」という星座があります。そのなかにひとつ明るい1等星がありますが、これが〝たなばた物語〟で有名な牽牛星です。

この〝わし〟というのは、ギリシャ神話によると天の大神ゼウスの使者で、ガニメーデスという美しい少年を、天までさらっていく姿だといわれています。このガニメーデスという少年は、トロヤの国のかわいい子どもでしたが、ゼウスはオリンパスの山の上からこの少年を見て、自分のお小姓さんにしたいと思いました。日本でもむかしの殿様はお小姓さんというのをよく使いましたが、要するに召し使いです。

いきなりさらわれたガニメーデスは、どんなにか驚いたことでしょうが、ゼウスには非常にかわいがられ、長ずるに及んでは天の酒倉の番人を勤めたということです。お倉の鍵を預かるぐらいですから、よほど信用があったものと思われます。このガニメーデスが、お酒のはいった壺を持っている形を表わした星座もあります。「みずがめ座」というのがそれです。

この「わし座」の主星〝牽牛〟と相対応して、天の川の反対側に輝いているのが「琴座」で、その主星が〝織女〟です。〝たなばた物語〟があまりにも有名なものですから、ほんとうに「牽牛」と「織女」の星が、7月7日になるとぬくぬくと動きだして、近づいていくのかと思っている人があるようですが、まさかそんなことはありません。両方とも大きな恒星ですから、動いていくようなことはないのです。ただ永遠に、天の川の両方に輝いているだけです。



〝わし〟と〝いるか〟。フラムスチード「天球図譜」（恒星社編）より

ここでちょっと動物の話から離れますが、この「牽牛」「織女」の2つの星について、お話したいことがあります。ギリシャあたりから伝わってきた名まえでは、牽牛をアルタイール、織女をベガといいます。アルタイールとは〝昇るわし〟という意味ですし、ベガとは〝降りてくる〟という意味です。夏ですと、東の地平線からこれらの星が昇ってくるころ、アルタイールは天の川の下のほうに、ベガは上のほうに見えます。そして、アルタイールは下から昇っていく、ベガは降りてくる。これも名まえだけのことで、実際に両方が近づいていくわけではありませんが、なんだか〝たなばた物語〟と相通ずるようで、たいへんおもしろいことだと思います。東洋の人が見ても、西洋の人が見ても美しいこの2つの星を、なんとか近づけてやりたいと思ったのでしょう。

もう1つ、この「わし」座の少し北に「いるか」という小さな星座があります。小さな星ばかりですが、西洋凧に尾をつけたような、かわいい形の星座です。この〝いるか〟は、アリオンという音楽家が海賊にだまされて、着の身着のまま海にとびこんで逃げようとしたとき、かれを助けて背中に乗せ、故郷へ無事に送りとどけたという感心な〝いるか〟なのです。■

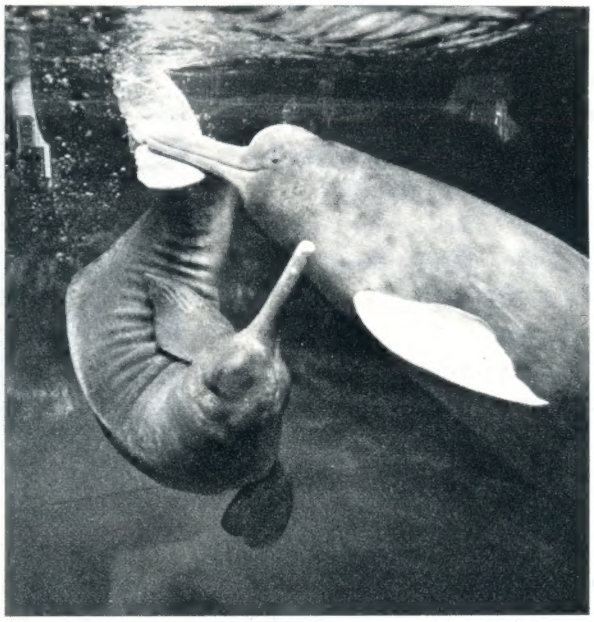
（天文学者）

飼育自慢

1

アマゾンカワイルカ

鴨川シーワールド



クジラの仲間は，海で生活しているものがほとんどであるが，例外的に淡水の大河川に生活しているものが4種類だけいる。アマゾンカワイルカは，この仲間の1つで，アマゾン川上流にのみ生息し，体長は成長すると2.2メートルぐらいになる。

特徴は，短い剛毛がまばらにはえている細長いくちばし，からだ全体からみてアンバランスに見える大きな胸びれと尾びれ，背中の皮をちょっとつまみあげたような低く長い背びれ，自由に動く首，そして，全体に灰色がかってはいるが，腹側にいくほど桃色が強くなっている体色などである。この独特な体色から，別名をピンクポーポス（桃色イルカ）とも呼ばれている。

生息場所がへんぴな所であるために，捕獲後の輸送などが困難で，飼育例も少なく，学問的な詳細な調査も実施されていない。

実際に飼育してみると，その動作のおもしろさを観察することができる。たとえば，一般にイルカ類は自分のくちばしで，尾びれをくわえることは絶対に不可能であるのに，このイルカはいとも簡単にやってのける。したがって，体幅の約2倍の狭い水槽(すいそう)に入れても，自由に方向を変えてしまい，イルカ類というよりも，爬虫（はちゅう）類のような柔軟さを示し，目をみはらせることがある。

しかし，知能指数は海産のイルカ類にくらべると，さほど高くはないようだ。■

（水族館長・鳥羽山 照夫）



〈問〉 キュウカンチョウを飼いたいと思います。どんな点に注意したらよいのか教えてください。

（金沢市・松本敬子・29歳・家事手伝い）

〈答〉 キュウカンチョウは4月ころに，〝一番子〟といわれるひなが，小鳥屋の店先に出てきます。東南アジアから輸入されるもので，産地により大きさが異なることがあります。

輸入したてのひなは，五分餌(え)というすり餌，または，近ごろはマイナーフードという固形のえさもあるので，それを与えます。これらに湯か水を足し，五分餌の場合には指頭大に丸め，口にもっていくとギャアギャアと口をあけるので，1回に3，4個を口のなかに入れてやります。1日に6，7回ほど与え，日がたつにしたがって回数を減らしていくと，そのうちに自分で拾って食べるようになってきます。

そうなったら，1日に2，3回，新しいえさをつくり，えさ入れに入れてやります。夏季にはとくにえさが腐敗しやすいので気をつける必要があります。

なお，発育盛りのひなのときには，えさのなかにゆで卵の黄身を4分の1ほど加えたり，塩気のない落花生(らっかせい)を5，6粒ほどすりこんでやると栄養がつきます。ビタミンやミネラルの補給には，バナナやミカンなどを1週に2，3回与えるとよいでしょう。

キュウカンチョウは飲み水を好む鳥ですから，飲み水はつねに新鮮なものを入れてやります。

水浴びは，あまりあわててやる必要はありませんが，水浴びの大好きな鳥ですから，自分で飲み水を浴び始めたら，バットなどに水を入れ，かごの中に置いて自分で浴びさせます。かごの上からじょうろでかけてやってもよいでしょう。このとき，あまり追いまわさないように注意してください。

春に購入したひなは，夏の終わりころから親毛に変わります。この際，よく皮膚病とまちがえる人がおりますが，これは生理的なもので心配はいりません。

キュウカンチョウは，むかしからことばをまねることで有名ですが，ことばを覚えさせるには，まずその鳥と仲良しになることがたいせつです。もちろん当たりはずれがありますが，雌雄は関係なく覚えるものです。低い声の人が教えれば低い声で，高い声の人が教えれば高い声で覚えます。一般に1年未満の鳥が覚えがよいとされていますが，必ずしもそうではありません。

キュウカンチョウはほかの鳥にくらべて，たいへん神経過敏な鳥で，ものに驚きやすく，また自律神経も敏感で，てんかん症状を起こしやすいのです。急に水をたくさん飲んだあとや，くだものを続けて与えたあとに起こしやすいので，気をつけねばなりません。

また，たいへん好奇心の強い鳥で，なんでもかまわず口にくわえていたずらをします。ときには異物を飲みこみ，目を白黒させたり，舌に糸をからませゲボゲボやったりして，飼い主をあわてさせることがよくあるので，えさ以外の異物には注意を要します。

羽虫がたまたまつくことがありますが，虫体を発見したら小鳥屋で売っている薬を使用すればよいでしょう。しかし，からだをかいてばかりいるからといって，必ずしも羽虫がわいているとはかぎりません。キュウカンチョウの寿命は40年ぐらいといわれています。■

（小鳥の病院院長）

仲間のひろば

百科を見る楽しみ

わたしはこの年になるまで動植物にあまりなじみがなく，いつかはこの方面にも興味をもたなければと念じておりました。「動物百科」はそういうわたしにとって格好のものであり，専門書と取り組んだあとのレスト・タイムに，動物のカラー写真をながめる楽しみはまた格別です。

先日は，もう十数年もいったことのない動物園に足を運んでみました。どの真猿亜目も百科でおなじみのものばかりで，百科のおかげで自分でもその観察力が自覚できるくらいでした。また，百科がのびのびした自然界で生息している動物を対象としているのに対し，狭いおりに閉じこめられている動物たちがみじめなものに思えました。

百科と現実の自然界とを有機的に結びつけて思慮し観察する人がふえれば，動物の危機とか自然界の破壊もおのずから妨げるのではないかと思います。■

（京都市・浅田俊三・22歳・大学生）

裏表紙説明

イノシシの子　イノシシ(*Sus scrofa*)の子は，写真で見るようにからだに縦縞(たてじま)があり，それがウリに似ているのでウリ坊主といわれている。日本ではクマタカやキツネ，アジア大陸などではトラやヒョウその他の動物に捕食されるが，その縞模様が視覚的にはカムフラージュとなるのであろう。

葉やつるが光を受けて反射した影が，からだの模様とマッチして，それとなく存在を目だたなくし，また，生まれる場所が〝カヤ原〟などだから，そこでも有効だろう。

イノシシは家畜のブタをのぞくと，有蹄（ゆうてい）類中もっとも多産で，ブタはイノシシを家畜化したものだから，このウリ坊主も1回に3～12匹も生まれる。イノシシは農作物を荒らすので害獣とされており，このウリ坊主もそうみられているが，虫やネズミを食べるということからみると，必ずしも害獣とはいえないだろう。■

（小原秀雄）

▶おことわり　本号『もうひとつの世界』は休載します。

アルノルフィニ夫妻の肖像

ファン・アイク

ロンドンのトラファルガル広場に面したナショナル・ギャラリーは，きわめて質の高い傑作ばかりを集めた美術館として世界的に有名であるが，そのなかでも特に珠玉のように輝いているのが，ファン・アイクのこの「アルノルフィニ夫妻の肖像」である。

画面は，富裕な商人の家の内部で，特にこれといって変わったところはないようだが，右手の寝台や天井から吊り下げられたシャンデリア，奥の壁にかけられた凸面鏡など，かなり凝った造りのもので，この家の主人の趣味と財力をしのばせる。その主人，アルノルフィニは，立派な衣裳を身にまとって妻とふたり並んで立ち，片手で妻の手をとりながら，もう一方の手を誓いを立てる時のようにおごそかに立てている。夫妻ふたりの姿が描かれているので，もちろん肖像画には違いないが，その姿は，いかにもおごそかでものものしい。それというのも，実はこれが単なる肖像画ではなくて，ふたりの結婚の記念画だからである。夫の方の手を挙げた誓いのしるしは，もちろん結婚の誓いであり，昼間なのに１本だけついている蠟燭は「結婚の燭台」の意味である。そして，ふたりの足もとにいる犬も，昔から「忠誠」のシンボルと考えられていたもので，このような場面にきわめてふさわしい。ファン・アイクは，そのような象徴的意味を持った犬を，彼特有の綿密な筆使いで，きわめて生き生きと，表情豊かに描き出している。■　（高階秀爾）



油彩
板絵
82×59.5センチ
1434年作
ロンドン
ナショナル・ギャラリー蔵

第１号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻34号　昭和46年10月31日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円


イノシシの子　　説明 30ページ

雑誌 0635―10／31